

特別寄稿

福島第一原子力発電所 視察

― 記者の視点から見た福島第一の今とは ―

日本経済新聞社編集局
総合解説センター
編集委員
滝 順一

日本原子力文化財団主催の報道関係者を対象とした「福島第一原子力発電所視察」が、二〇二一年六月二八日に開催されました。

事故から一〇年が経過した原子力発電所は、記者の方々の目にはどう映ったのでしょうか。

今回は、日本経済新聞社の滝順一さんに、視察のレポートを寄稿していただきました。

福島第一原子力発電所の廃炉現場は見るたびに違った姿を見せる。今回は事故炉周辺の片付けが進む一方で、敷地の北側で廃棄物の保管庫建設などが精力的に進められつつある様子が強く印象に残った。また五号機の圧力容器の真下に入りペダスタル内部の様子を実地で見る事ができたのは収穫だった。

廃炉資料館にて説明を受けた

六月二八日、ジャーナリスト数人と日本原子力文化財団のみなさんといっしょに、東京電力福島第一原子力発電所を訪れた。筆者にとっては二年ぶりの訪問だった。

午前一〇時過ぎに富岡駅で集合。東

京電力の視察用バスで東電廃炉資料館に向かった。梅雨時の台風接近で天候を危ぶんだが、まばゆいほどの青空の視察日和になった。

資料館は、原子力事故の記憶と記録を残し事故を二度と繰り返さないため反省と教訓を伝承する目的で二〇一八年一月に開館したものだ。ここは初めて訪れる。

日程の制約から館内を時間をかけて見ることはできなかった。シアターホールで三・一一の地震発生から原発事故対応の状況を紹介する短い映像を観て、会議室で廃炉の状況などについて説明を聞いた。

内閣府原子力災害対策本部廃炉・汚染水対策現地事務所の木野正登参事官（経済産業省資源エネルギー庁廃炉・汚染水対策官）から、四月に海洋放出の方針が決まった多核種除去設備（ALPS）等処理水についての説明があった。海洋放出による放射線影響が自然放射線に比べても小さいこ



●処理水の処分について説明する木野正登参事官

とや、懸念される風評被害の払拭に向けた対策、福島県水産業への支援策などを三〇分ほどかけて丁寧に説明を受けた。

短い質疑応答後、東京電力ホールディングスの木元崇広・廃炉コミュニケーションセンター副所長兼リスクコミュニケーションから福島第一サイトの現状と視察にあたっての注意事項の説明があった。

その後、隣接する複合商業施設「さくらモールとみおか」で参加者各人がそれぞれ昼食を取って、一二時一五分

汚染水とALPS処理水の違い

◇「汚染水」と「ALPS処理水」とは異なる。

- 燃料デブリに触れ、日々、建屋内で発生する、放射性物質を多く含む水が「汚染水」
- これを浄化処理し、トリチウム以外の放射性物質を規制基準値以下まで取り除いたものが「ALPS処理水」。

ALPS処理水ができるまでの流れ



27

(経済産業省提供)

に再びバスに乗ってサイトに向かった。
サイトに入構しホールボディカウンターを受検。G装備(マスクと帽子、手袋)を着用してバスでサイト内を巡

たが、巨大な構造物を現実目の当たりにすると、解体作業の困難さが想像できる。
また一、二号機原子炉建屋の周囲が以前に比べきれいに片付けられてい

った。最初の下車は一号機に面する見晴台だ。それぞれ異なる

る廃炉の段階にある一、四号機を見渡すと、作業の着実な進捗に気がつく。一、二号機共用の排気筒の上部がなくなったのは二

年前と比べて大きく目立つ変化だ。地元企業のエイブルが遠隔操作で上部の構造物を切断・解体した様子はニュースで見えてい

る印象を受けた。デブリ調査や取り出しに向けて作業環境が整いつつあることが推測できる。

変化の大きさという点では、視察の後半で通過したサイト北半分の廃棄物エリアの状況も今回、強い印象を受けた。巨大な廃棄物保管庫の建設が進み、数年前まではおそらく雑木林だった場所が切り開かれて広大な空き地が出現していた。そこには様々な固体廃棄物を貯蔵するための設備が建てられる予定だという。

事故処理と廃炉作業を通じて大量の廃棄物が発生する。それらは金属やコンクリート製の容器に入れられてサイト内で野ざらしで保管されてきた。過去の視察で筆者はその様子を目にしてきた。それらはより安全な保管と働く人の被曝低減のため専用の建屋に収めていく必要があることに今回の視察で改めて気がつかされた。東京電力はすでに保管庫をいくつも建てて対応してきたが、廃炉作業の進展とともに増設していかなければならないのだろう。



●高台から廃炉作業が進む2、3号機を望む

ALPS処理水の処分が進めば、処理水タンクはやがて数を減らしていくのだろう。すると今度はタンクを解体するなどして生まれる固体廃棄物の貯蔵庫がサイト内に立ち並んでいくに違いない。固体廃棄物の最終的な処分の道筋はまだ見えていないという。廃炉というのは廃棄物との戦いだと感じさせられた。

なかなか見学することができない
五号機内部へ

視察でもう一か所、バスから下車したのは五号機だ。二、四号機と同型機である。その原子炉格納容器に入り圧

力容器の下側がどのような場所であるかを实地で見て、二、三号機で核燃料が溶け落ちていた場所のイメージを得ようというのが、今回の視察のハイライトでもあった。

そこは想像より狭かった。見上げる、制御棒の駆動装置や中性子測定装置の下部が多数突き出ている。足元は炉内調査のロボットの画像で見たグレーチングだ。しゃがんでいるか中腰

でないと頭をぶつけてしまう。「ペDESTAL」と呼ばれる圧力容器の支持構造物の内部になるのだが、直径は五・四メートルほど。数人入れば動く余地もない。



●5号機のペDESTAL内は狭く頭上には制御棒駆動装置の下部が並ぶ

筆者は他の原発（沸騰水型原発）でペDESTAL内に入って、いちばん底から制御棒駆動装置を見上げた経験があったので、この窮屈さは予想外だった。かつて見学したのは大きさの違う原子炉だったので。五号機で実感した狭さはデブリ調査などについて今後記事を書く際に頭に置いて置かなければならないと思った。

また二号機でロボットなどの進入路に使われたX6ペネトレーション（格納容器貫通孔）と同型のものを五号機で見られたのも参考になった。

なお五号機内は防護服やゴム手袋を着用する「Y装備」に着替えて入った。

今回は敷地の北半分をほぼ一巡りしてバスを降りたところで、透明なボトルに入れた処理水の実物が用意されていた。見た目はきれいな水。もちろんガンマ線の計測器を近づけても反応しない（トリチウムが発するのはベータ線なのでこれは当然）。

ホールボディカウンター受検後、装備を解いて視察は終わった。一六時三

〇分ころ廃炉資料館に戻り三〇分ほどの質疑応答の時間となった。

視察全般での感想を書いておきたい。視察や記者会見においてメディア

が知りたいことと発表側が知らせたことの間には常に溝がある。今回の視察でも木野参事官はトリチウムの性質を詳しく説明されたが、記者団から出た質問はトリチウム以外の放射性物質だった。筆者の知る範囲のことだが、トリチウムよりそれ以外の放射性物質のリスクについて関心を持つ記者が多いように思う。一般人とは関心の在りどころがやや違うのかもしれない。

廃炉資料館はじっくり見学したいと思った。冒頭の映像だけでは東京電力の「反省」について具体的な言及がされておらず、正直なところ食い足りなさを感じた。お昼休みに短時間ながら展示を見て回ったところ、「反省と教訓」と名付けられた展示で、政府の地震調査委員会や東京電力自身の調査で想定より高い津波の襲来可能性が指摘されているながら、対策を先送り

していた事実について触れていた。他にも一〇年間で明らかに変わった

事実を受け止めて、反省と教訓につながる展示内容があるのだろうと思う。

この施設は原発サイトに付随する通常の展示館などとは性質が全く異なる。できるだけ多くの人に時間をかけて見てもらいたいと思う。

最後に、今回の視察で説明をいただいた木野参事官、木元リスクコミュニケーターはじめ東京電力の方々、また視察を企画していただいた大滝大悟氏はじめ日本原子力文化財団のみなさまに改めて感謝を申し上げたい。

（写真提供：東京電力ホールディングス）



日本経済新聞社編集局
総合解説センター編集委員

滝 順一
(たき・じゅんいち)

1956年 愛知県生まれ。早稲田大学政治経済学部経済学科卒、1979年日本経済新聞社入社後、編集局産業部（現ビジネス報道ユニット）、新潟支局、科学技術部（現ビジネス報道ユニット）、米州総局ワシントン支局、大阪本社編集委員、東京本社科学技術部長、編集局次長、論説委員などを経て2016年9月から編集局経済解説部編集員、2021年3月から組織変更に伴い編集局総合解説センター編集委員（現職）に。